



© UNICEF/NYHQ2008-0288/Markisz

優先すべき支援の中で、
チョークと黒板は
C-H-A-N-G-Eをもたらす
—ロイターズ・アラートネット、2008年11月12日

基礎教育とジェンダーの平等

景気が後退したとき、最初に影響を受けるのは往々にして教育である。そして、それと共に、家族が貧困から抜け出す機会も奪われていく。食料・エネルギー不足に対処するための革新的なアイデアの種も、子どもたちが学校に行くことができなくなると育たなくなる。例えば、国連諸機関が共同で行ったパキスタンでの調査によると、例えば、2008年の食糧危機の際、深刻な食料不安に陥った世帯は28%に増え、最も貧しい世帯では、支出の70%が食料に充てられていた。同調査で、食糧価格の急騰に対処するため、子どもたちを学校に行かせるのをやめたり、仕事に就かせていたりしていたことも分かった。物価高騰の煽りを特に受けたのが女子教育だった。

逆説的にはなるが、国は往々にして、教育への投資が最も必要とされるときに、教育予算を削減しがちである。この傾向に対処するために、ユニセフはミレニアム開発目標の2と3（普遍的初等教育とジェンダーの平等）を支持し、初等教育への普遍的なアクセスと修了というコミットメントを達成するために、パートナーと協働して努力している。これらの目標達成へ向けての前進は、単なる数値以上の指数を使って測られる。教育を通じた女の子と若い女性のエンパワーメント、すべての子どもたちへの質の高い教育、早期幼児教育を通しての初等教育への準備、緊急事態や緊急事態後の移行期における学校の復興にも、その成否がかかっている。

普遍的な初等教育を

ユニセフが調整役となっている国連女子教育イニシアティブ（UNGEI）は、女子と男子の初等教育への就学、出席、修了を増進する強力なツールとなっている。UNGEIの活動は、世界銀行が主導するファスト・トラック・イニシアティブやユネスコが主導する「すべての子どもに教育を」運動のような、他の教育関連のパートナーシップをも補完している。

2008年にナイジェリアのバウチ州で立ち上げられた女子教育イニシアティブは、目覚ましい成果を収めている。女子の総就学率は82%の飛躍的な伸びを見せ、ジェンダー格差も2005年の23%から、2008年には15%にまで引き下げられている。このイニシアティブには、ナイジェリアの3つの州での女子の学費の無料化、学生による個別指導、メンタリングとカウンセリングの実施、「学校全体」の開発計画を推進するための少額の奨学金の提供、子どもに優しい学校を導入するための研修も含まれている。

質の高い教育

コミュニティ内の学校で、子どもたちが将来に対して確実な準備ができないのであれば、貧しい家庭は、子どもの労働力を犠牲にしてまで子どもを学校に行かせようとはしない。子どもを引きつけることもなく、子どもが将来成功を収めるためのツールも与えてくれない授業は、若者のやる気を失わせる。おとなになる責任よりも、教育を修了することを優先させようとは思わないからである。学校は生徒にとって、「倉庫」以上のものでなくてはならない。子どもを中心とし、生徒の現行のニーズを敏感に把握し、将来彼らがおとなになった頃の生活に沿ったものを学校は提供できなければならない。

ユニセフは「子どもに優しい学校」というコンセプトを全面的に受け入れているが、中国、ミャンマー、ルワンダ、旧ユーゴスラビア・マケドニアといった国々で、標準化に向けて技術的な支援を提供してきた。さらに、ユニセフは、学校を基盤とする「水、衛生、衛生教育イニシアティブ」について、インパクトと維持可能性についての調査を実施している。2008年、ユニセフは子どもに優しい学校についての包括的なマニュアルを作成し、子どもを中心に置いた、また、子どもを参加させる形での質の高い教育を実施する方法を示した。ユニセフ子どものための大使であるヨルダンのラニア王妃は、子どもに優しい学校を通して教育の質を高めるよう、各国に積極的に呼びかけている。

緊急事態と復興移行期

災害時、教育は心的外傷を癒し、復興への活性剤となり得る。

ユニセフとインターナショナル・セーブ・ザ・チルドレン・アライアンスは、緊急事態下での教育を主導する機関間常任委員会クラスターの二本柱となっている。

2008年、ユニセフはエクアドルに緊急教育資材と技術的な支援を提供した。このおかげで、ひどい洪水にも関わらず、2万人の子どもたちが学校に通い続けることができた。また、ハリケーンによって学校が損壊したハイチでも、10万人以上の子どものために支援を届けた。内戦で疲弊したスーダンのダルフルで、ユニセフは168,000人以上の子どもたちに学習資材を提供したが、このうち44%が女子であった。ミャンマーでは、深刻な被害をもたらしたサイクロンの後、ユニセフの支援で2,300の学校と343の早期幼児教育センターが再開され、315,000人の子どもたちが、中断を最小限に抑えて学習を続けることができた。

アドボカシー

普遍的な教育とジェンダーの平等を実現するのに一番難しい問題は、人々の行動様式を変えることであろう。ときに、根強い信念から抜け出させるのは、途方もなく困難な仕事となることもある。

ユニセフは、早期幼児教育、初等教育の無料化・義務教育化・普遍化、ジェンダーの平等、緊急事態時の対応の中に教育を含めることを、継続的に提唱している。例えば、2008年、ベナンで重要なアドボカシー・キャンペーンが行われ、大統領夫人が「すべての女子に教育を」キャンペーンを先導し、その結果、2007年に比べ、女子の就学は20%も飛躍的に増え、男子の就学も18%伸びた。

国連女子教育イニシアティブ（UNGEI）は、技術的な支援を提供し、情報収集の中心となり、データを支援することで、国の教育に対するコミットメントの中で、ジェンダーの平等と女子教育に目を向けさせるよう、さらなる努力を行っている。このイニシアティブではまた、緊急事態下における「平等と包含」のためのツールを開発し、2008年のEFA（普遍的教育）グローバル・モニタリング・レポートでジェンダー分析を行い、ポピュレーション・カウンシルと共に、青年女子の就学についてのマッピング研修を実施した。

ミレニアム開発目標に掲げられているすべての目標は、教育を受けた人々にかかっている。教育を受けられない何百万人もの子どもの中には、非常に才能があり、賢い子どもたちも埋もれている。それらの才能を失うことは、子どもにとっても、国にとっても、そして世界にとっても大きな損失である。



© UNICEF/NYHQ2008-0559/Naing

教室がつぶれない ようにする

2008年5月2日、サイクロン・ナルギスがミャンマーを襲った。建物を破壊し、村に洪水をもたらし、何百万人の生活が損なわれた。猛烈な風がやみ、水が引いた後で、8万4,537人の死が確認された。また、80万人が避難を余儀なくされ、4,000を超える学校が損壊した。

ミャンマーでの災害は、2008年に起きた大災害の中で、学校の校舎が、嵐やその他の自然災害に耐えることができなかった事例のひとつである。サイクロン・ナルギスがミャンマーを襲った10日後、中国で大地震が起き、1万2,000を超える学校が損壊し、何千人もの子どもたちが命を失った。10月には、パキスタンで地震が起き、約300校が修復不可能な状態となった。その後、2週間も経たないうちに、ハイチでは、度重なるハリケーンや熱帯性の嵐によって脆弱になった学校の校舎が崩れ、100人の生徒と先生が命を落とした。

教育を受ける権利、そして「子どもに優しい学校」という環境の中で教育を受ける権利は、緊急事態下でもすべての子どもが持っている権利である。学校は危機の時には避難する場所となり、子どもたちが日常性を取り戻す場となり、傷ついた心を癒す場所とならなければならない。しかしながら、往々にして、疎かな工事や危険な手抜き工事により、学校は、避難場所となるどころか、死の危険をはらむ場所となることがある。ユニセフは、安全で子どもに優しい学校を主導するアドボケートとして、緊急事態後の学校の再開がどれほど急がれようとも、校舎のずさんな工事を許さない。

ユニセフは、サイクロン・ナルギスの緊急事態に対応して、生存者の命を救うための支援事業を間髪を容れず行った。そして、安全な学校は、その優先事項のひとつであった。

「より良い学校」建設を提案する一機関として、ユニセフはミャンマーの悲劇を機会に転じ、瓦礫の中から子どもに優しい学校を建設し、被災した子どもたちに、以前より良質な教育を提供できるようにした。新学期が予定通りサイクロンが去った4週間後から始められるよう、ユニセフは、風や地震の力に負けない当地の資材やデザインを使い、崩壊した学校の代わりに安全に配慮した臨時の学習空間を設置した。

一時しのぎの修理をやめて、地元の人たちを計画立案・建築に関わらせ、文化とアイデンティティを尊重するやり方は、コミュニティ意識を醸成し、学校を維持し、そして気遣うという、村人自身のコミットメントを保障するものとなった。これに加え、学校はどうあるべきかという先入観は持たないようにし、ユニセフは、どのような構造のものがサイクロンによって損壊したか、あるいはこれに耐えたかの分析を慎重に行った。その結果、学習場所としての学校という範疇にとどまらない設計がなされ、社会改善、コミュニティの人々がふれ合う場所、シェルターといった役割を兼ね備えた中心的存在となった。

緊急事態下の学校に対する支援事業が成功したおかげで、ミャンマー教育省は、ユニセフに対して9つのモデル校を建設するよう依頼してきた。まもなく、瓦礫の中に子どもに優しい学校ができていくはずである。将来の学習空間は、魅力的で生徒たちの興味をひきつける場所となるであろう。スポーツをする広場、チンロン（ミャンマー伝統の蹴鞠）用のコート、庭、その他子どもたちが学習し、成長できるたくさんの機会を提供してくれるさまざまな特徴を兼ね備えた場所になるはずである。同様に大切なのは、自然が再び猛威を振るうとき、学校が子どもたちの安全を保つ場所となることである。